「素晴らしい思い出をありがとう」

長期交換留学生体験記

寄稿

「たくさんの出会いがあった」「何ものにも代えがたい財産になった」。アメリカ、イギリス、中国、ドイツ、……2007年度長期交換留学生４人からの体験記をお届けしよう。

各国留学生に囲まれ自分見つめた

名古屋　悠（経済4）

アメリカ・オレゴン大学

オレゴン大学の留学から帰国して1カ月が経ち、留学中に感じたこと、考えたことを生かしながら、日本での生活をスタートさせました。

留学の9カ月間は私にとって非常に濃厚なものでした。それは、私の留学が人との出会いにあふれていたものであったからです。大学の寮で生活をし、正規の授業を受講するという毎日の中、驚くほどの出会いが私を待っていました。現地の学生との交流も当初の心配とは裏腹にスムーズに行うことができました。

また、オレゴン大学は世界中の大学と提携をしていて、そこから留学をしてきた学生と交流する機会も多くありました。特にアジア圏の留学生は非常に多く、文化背景も似ていることから、彼らと良い交友関係を築くことができました。他国からの留学生同様、私のような日本人留学生も多数在籍をしていました。同じ境遇の中で、苦労や努力を共有することで、彼らとの関係もまた親密になっていきました。

留学中は、主に大学の正規授業を履修し、現地での単位取得を目指しました。私は経済学部なので、ミクロやマクロといった基礎の科目から応用型の経済学の授業を履修しましたが、やはり言葉の壁が非常に高かったです。ときには講義内容がほとんど聴き取れず、予習・復習を行わなければ取り返しのつかないことになってしまうので、深夜まで勉強するのが当たり前という毎日。それでも週末になれば、友人の家や寮の一室に集まり、国籍に関係なくみんなでわいわい騒いでストレスを発散し、メリハリを利かせながら、過ごしてきたと思います。

留学を通じて、語学を習得し、専門分野の知識も得ることができたと思います。それ以上に、さまざまな国から集まったさまざまなタイプの学生に囲まれながら、自分を見つめ続けてきたことが、一番の成果であると思います。

楽しい思い出は数え切れませんが、出会いが増え、彼らとの仲が深くなっていくにつれ、自分の人間性の未熟さを痛感することもありました。今は経験してきたことすべてに感謝しています。

わくわくするような世界の中で、全力で大学生活を過ごしたいと決意した留学。友人と別れ、現地を離れるときはズキズキと心が痛みました。この留学で経験したことが、これからの自分の人生に生かされてくると思います。

▶ 大学の寮でルームメートと一緒の名古屋さん（左）

高レベルの授業にきたえられた

兪　昕晨（文　4）

イギリス・ブリストル大学

留学によって得られるものは、どこの国でもどこの大学でもある程度同じだと思います。大切な仲間、異文化に対する知識、語学力を得るというようなものです。

私もイギリス留学を通じてこの3つを得られたと思います。たくさんの友達、彼らと交流する上で学んだ異文化への知識、交流する上で必要不可欠の語学力。留学で得た大切なものです。しかし、これらについて詳しく書くことはやめようと思います。イギリスだからこそ、ブリストル大学だからこそ得られたものを紹介します。

ブリストル大学で得た最も大きいものは、レベルの高い授業です。今まで3つ以上の語学学校で授業を受けましたが、ブリストル大学のPre-sessional コースほどレベルの高い授業を受けたことはありません。アカデミックなスキル、特に大学に通う上で最も大切なライティング能力向上を目的とした授業は、目標が高いせいもあって非常に難しいものでした。週末以外は常に机に向かうことも少なくなく、最初のころは苦しい思いをしていました。しかし、この経験があったからこそ、TOEICの点数が100点以上上がり、満点近くを取れたのではないかと思います。

また、いい意味で英語学習に対するごうまんさが消えました。Pre-sessional コースで、自分の語学力ではどの大学に行っても通用しないと痛感させられ、一から英語に向き合うきっかけを与えてくれたのです。大学での授業もこれと同じで、難しかった分、やりがいを強く感じ、専攻の歴史に対しての認識も180度変えてくれました。これをきっかけに歴史、ヨーロッパ文化にさらなる興味を持つようになりました。もう一つブリストル大学に行ってよかったと思ったことは、ヨーロッパの人たちと仲良くなれたことです。今まで、まったくと言っていいほどヨーロッパに対する知識がなかったので、授業からだけではなく、彼らの価値観や考え方に触れることによって学んだことは本当に良い経験になりました。

EUとは何か、民族とは何か、彼らにとってのアジアとは何か、そういった話し合いのチャンスを手に入れられ、自分の視野を予想よりもはるかに広げることができました。

厳しかった分、得たものは大きい。それがブリストル大学留学での感想です。留学を経て、一回りも二回りも大きくなれたのではないかと思います。

▲ クラスメートと一緒の兪さん（前列右端）

苦手だった「読み」「書き」を克服

翁　娟珍（経済4）

中国・上海大学

8歳で中国福建省から家族と共に来日以来、日本で暮らしています。家での会話は中国語ですが、中国語のレベルアップと専門的な知識を得ようと上海大学に留学しました。

最初のころは、「読み」「書き」が苦手で、授業で出された宿題や中国の新聞を読むのが困難でした。「書き」に関しては、本来、中国語の簡体字と日本語の繁体字とで混乱してしまい、文章を書く際によく間違いをしていました。けれども毎日、日記や作文を書いたり、それを週に一度、先生に見てもらったりしたことで、漢字もあまり間違えなくなり、文法なども徐々にネイティブレベルに達しました。

「書き」と同じように「読み」も苦手でしたが、授業の休み時間などを利用して、先生に発音のポイントなどを学び、「読み」もすらすらとできるようになりました。また、会話の際に、中国語の正式な発音、例えば〝h〟がつくピンインは舌を巻かなければならないといった最も基本的な発音を、以前はあまり気にしていませんでしたが、学校で開かれた中国語コンテストなどに参加したことで、きれいな中国語を話せるようになれたと思います。

授業では、教科書の内容以外に本場の中国語を学べることが多く、先生や学生一人ひとりが応用力をレベルアップできるように授業の環境づくりをしてくれたため、自分が相手に何かを伝えたい時に思考する速度が以前とは違って、すぐに出てくるようになり、使う文法や語彙もかなり増えたと思います。

また、そういった言葉の応用だけではなく、ほかの興味のある授業にも参加しました。聴講した授業にはさまざまな内容があり、例えば中国の祝日の由来だとか、その祝日は何をして、何を食べるのかといったように幅広く、昔からずっと伝えられてきた文化や習慣、歴史、中国経済の現状や動向や抱えている問題など、中国のさまざまな面についても学びました。

そのほか、留学にきたばかりの学生と先生との間や、日本人学生のミーティングの通訳などをしました。週1、2回は上海市内に出かけ、積極的に地元の文化や人々と触れ合いました。上海語も、最初は全く聞きとれなかったのですが、今では、ある程度は聞きとれるようになりました。

〝中国語を学んだ〟という以上に、いろいろな意味での〝中国〟を知ることができました。

▶ 西安で友人と。右から2人目が翁さん

「心の余裕」重視するお国柄に学ぶ

奥田　真結子（文　4）

ドイツ・マルティンルター大学ハレ・ヴィッテンベルク

1年ぶりに日本に帰ってきて友達や恩師と再会すると、当然ながら、「留学はどうだった？」と尋ねられます。その質問に私は、いつも自分にとって最も的確な返答ができないでいます。なぜなら私にとってドイツで過ごした1年間は、とても密度の濃い期間であり、まるで「あなたの人生はどう？」と尋ねられるのと同じくらい、一言で答えるには難しい質問だからです。

では、私が得たものとは一体何だったのでしょうか。それらはおそらく、目に見えるものではないと思います。単に言語能力だけではなく、私がこの目で見て記憶したもの、そしてさまざまな経験をし、ドイツ人の価値観を学び、いい方向に変わっていった自分自身、これらすべてだと思います。

その一例として、日曜日の営業についてお話します。みなさんは、休日の日曜に洋服を買ったり、カラオケなどをして過ごしたりすることもあるかと思います。しかし、それらのお店が日曜にすべて閉まっているとしたら、どうでしょう？

おそらく、不便だと思うのではないでしょうか。しかしドイツでは、日曜日は基本的にお店がすべて閉まっています。洋服屋さんも、スーパーでさえも、です。

それはこの国の人々が、皆が休むときは同じように休みをとっているからです。私も休みの日にお店が開いていないのは、なんだか物足りなく感じていたのですが、これはドイツ人が「便利さ」よりも「余裕」を重視しているからではないかと思いました。この価値観は一部分にすぎませんが、その結果、ドイツ人にはどこか日本人にはない「心の余裕」があるように思えました。

このように、留学しなければ考えもしなかったことに気付かされ、自分の中で新たな考え方を発見できたのです。そして逆に、ほかの事柄で自国の良さを再確認することもできました。

人が日々を過ごす中で、楽しいことがありながらも辛いこともあるように、私の留学生活も楽しいことばかりではなく、辛く大変なこともありました。加えて言語のカベもあり、つらい出来事は日本にいたときよりも多かったかもしれません。それでも、私にとってこの1年間は、何物にも代えがたい財産であり、ドイツは私の第2の「ふるさと」となりえています。私にあの時間をくれたドイツが、今でもとても好きです。

▶ ドレスデンのオペラハウス前で。右端が奥田さん